二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

反逆の天使たち

小説 高橋ショウ
挿絵 渡瀬　薫

プロローグ ―― 006
第一章：イブリース ―― 010
第二章：麗音と詩音 ―― 031
第三章：真姫 ―― 054
第四章：死天使の罠 ―― 101
第五章：反逆の天使と死の天使 ―― 173
エピローグ ―― 239

登場人物紹介

Characters

リオ（イブリース）

《聖母》の魂を持つ者によって生み出された人造人間。人間を護るためにイブリースに変身して戦う。

火神（ひかみ）　真姫（まき）

影から日本を守護する組織《聖》のメンバー。

真山（まやま）　麗音（れおん）

《神の予想から外れた進化》をした人間の一人。

真山（まやま）　詩音（しおん）

麗音の双子の妹。姉と同じように進化を遂げた人間。

アズラエル

神に仕えて人類を滅ぼそうとする天使。

ラミエル

アズラエルの愛人兼秘書の天使。

『第五章　反逆の天使と死の天使』より　その１

で肌をまさぐられているような感覚。子宮がむずむずと蠢き、まるで身体の内側が手でなぞられているようでもある。吐息がさらに熱く、激しく吐き出される。

「ふうぅ……はぁはぁ……んっ」

異常としか考えられない量の汗が全身から噴き出し、床にポタポタと滴り落ちた。

（リオ……ごめんなさい……）

真姫はそれを見せられていた。それは少し前の自分の姿――目の前でイブリースが汚されていくのは、自分がそうされているより数倍辛いことだった。

「さーて、私たちも楽しむとしましょう」

ラミエルの言葉とともに、力なく横たわる真姫のヴァギナにバイブが添えられた。真姫は自分の身体を押さえる女の手を払おうと身悶えするが、それはあまりにも弱い抵抗。

バイブは秘唇にずぶずぶと押し込まれていった。

「ひぎ、くあぁぁ」

極太のバイブを押し込まれ、真姫の口からは苦痛の声が上がった。ラミエルはそれに構わず、秘肉をバイブでかき回す。真姫は身体を引き裂かれそうな激痛に裸身をくねらせた。

「ま、真姫……やめろ……やめさせろ……！」

イブリースの強靱な理性は、合計三本もの薬を打たれてもまだ失われてはいなかった。

しかし、そのあまりにも弱々しい抗議の声は、イブリースの身体をもてあそぶタカノの好奇心を刺激してしまうことになった。

「ふん、まだ耐えるか。どうやら同じ濃度のクスリを何本打っても無駄のようだねえ」

両手に持っていた羽根を捨て、またしても新しい羽根を引き抜く。

「だけど、こいつには三倍の濃度の誘淫薬が仕込んであったりするのよ。これを打たれてもガマンできるかな」

羽根が触れたのは――もっとも彼女が触れてほしくない箇所――ヴァギナだった。汗でベットリと濡れたイブリースの身体が小さく悶える。

タカノは股間の布を横にどけると、片手で秘唇を割り広げ、クリトリスに羽根の骨を触れさせた。敏感な肉の突起を直接いじられ、イブリースの唇から苦悶の声が微かに漏れる。

そして次の瞬間、身体に凄まじい衝撃が走っていた。心臓の鼓動が早鐘のようにかき鳴らされ、頭の中がぐるぐると回転する。

「ひ、い、うぁ、あ……熱い、熱い、うあ、あああ！」

ちゅぷ……。

股間から音が漏れた。紛れもなく、愛液が溢れ出る音だった。粘ついた液体が我先にと溢れ出し、あっという間に流れ出すほどの量になった液体がトロトロと尻を伝う。

金色の瞳から零れた涙と唇の端から零れた唾液は頬と喉を濡らし、その衝撃の強さを表

しているかのようだった。
タカノの全身が変化して鷹型のバイオ・エンジェルに変身する。尖った嘴(くちばし)をイブリースの胸に近寄らせ、硬く尖り、汗で覆われた乳首を甘く噛みながらざらついた舌で擦るように舐め上げる。もう片方の乳房には鉤爪の生えた指が食い込んでいた。
「ひっ、くあ……つうっ！」
イブリースの顔が苦痛で複雑に歪む。痛さはある。だが、すぐに痛さは甘さに変化して神経を優しく浸食した。神経を直接愛撫されるような異様な感覚に、ついにイブリースの唇からは甘い声が漏れ出していた。
「あ、あふ、ふあ……」
タカノは乳首から嘴を離すと、鳥のものに変化した両手を使って乳首を強く挟んだり引っ張ったりし始めた。尖った爪で引っかき、摘んでこね回す。すでに硬くなっている乳首は気持ちのよい弾力でそれに答えた。ぴりぴりと張りつめた快楽。
「一つ質問があるんだがな」
執拗に乳首を責めながら聞く。イブリースの金色の瞳は少しずつ虚ろになっていく。クスリが与える桁外れの快感が少しずつ彼女から正気を失わせていた。
「お前さんってヴァージンかい？」
「うるぁ……さいっ、んああ……！」

その口から紡がれる言葉は乱れきっている。それはすでに甘く熱い吐息だった。
「開発されていないところをみると、お前さんってヴァージンなんだろう？」
言いながらイブリースのラヴィアに手を伸ばす。尖った鉤爪で薄いアンダーヘアに覆われた割れ目を軽く引っかいた。
「い、ひ、あああっ！」
ただ軽くなぞられただけだというのに、イブリースは絶頂を迎えるような反応を示す。思考がピンク色に染まり、甘い意識に支配されそうになるのを懸命にこらえた。イブリースは唇を噛んでそのピンク色の意識を振り払い、一言一言を区切るように吐き出す。
「うる、さいっ！　なんだって、いうんだっ！」
目を潤ませ、頬を真っ赤にさせながらムキになるイブリースを見てタカノは笑った。
「その反応、間違いなくヴァージンだねえ。こりゃアズラエル様と交代だな。あのお方を差し置いてあっしが奪うわけにゃいかんからねえ……」
最後に羽根で乳首をくすぐってから離れる。またピンク色の意識がイブリースを快楽の園に押し流そうとするが、頭を強く振ってその波をやり過ごそうと耐え忍んだ。
イブリースの前にアズラエルが立つ。それを睨むイブリースには、つい先ほどまであったはずの強靭な意思を備えた眼光がなかった。いまのイブリースはただの少女に戻りかけ

ている。無力でなにもできない少女に。アズラエルはそれが楽しくて仕方なかった。
「どうだ？　まだ私の物になる気はないか？」
すでに憎まれ口を叩くほどの元気がないのか、イブリースは弱々しく頭を振る。それでも拒絶の意思を捨てずにいられたのは、真姫や双子たちに接触することで意思の力が強くなっていたせいだろうか。
敵であるバイオ・エンジェルの物になんてなってたまるか。自分は人間の敵にはならない。人間を護るんだ――。快楽で混濁した頭の中で、様々な思いが渦巻いていた。
「人間など愚かで矮小な存在だ。そんな人間など護る価値があると思うか？」
「ある……弱いからこそ護る……そう思える……」
力はないが、小さな声でとつとつと話す。死の天使はその反応に驚いたように手を伸ばし、尖ったイブリースの乳首を軽く指で弾いた。クスリの効果で敏感になった彼女にはそれだけでも大きな快感となる。
「あうっ」
イブリースの身体が悶えた。快楽は甘い電流となって全身を駆け巡る。
「あちらの娘といい、お前といい、強情だな。強情同士気が合うというわけかな？」
手が濡れた女の花園に伸ばされた。そこはぐちょぐちょに濡れて濃厚な女の香りを放っている。じっとりした密林が掌で揉むようにぐいぐいと擦られた。

「ふぁぁ……！」
口が大きく開けられ、唾液がだらだらと滴る。アズラエルは背を反らせて悶える彼女の身体に顔を寄せ、白い喉を濡らす唾液と汗を舌で舐め取った。やはり指と同じく氷のごとき冷たさを持つ舌が喉を這うたび、指が股間を這うたびに、その身体が快楽から逃れるために小刻みに揺れる。
「くは、や、やめて……」
つぷっ……。
指が秘唇を押し広げ、湿った音を立てて秘肉の中に挿入された。唇から苦痛と甘さの混じった吐息が漏れ、全身にゾワリと快楽が走る。
金色の瞳を潤ませる涙が頬を濡らす。なんとか耐えようとしても、意思とは無関係のところで身体が反応を返してしまう。秘肉から透明な蜜があとからあとから溢れ出て止まらない。アズラエルは笑いながら指で彼女の秘肉を引っかき回し、唾液でベタベタになるまで喉を舐め回す。
アズラエルの指と舌が与える快楽が、ともすればイブリースの思考から正気を奪い去ろうとしていた。このまま甘さに身を任せて彼の物になってもいいという考えが頭をもたげる。だが潤んだ瞳にラミエルに責められる真姫の姿が映れば、その危険な思考を受け入れることはできなかった。

「ダメだ……いやだ……」
ここでアズラエルの手に堕ちるようなことになったら、目の前で虐げられている真姫にも危険が及ぶことは明らかだった。自分を護るためにヴァージンを奪われた彼女をこれ以上怖い目に遭わせたくない。彼女を救いたい。そのためにはアズラエルに屈するわけには……いかないのだ。
しかし、心地よい快楽の波動がそんな考えは捨てろと呼びかけてくる。少しずつ少しずつイブリースの頭を支配しようとする。彼女には、その感覚に支配されないよう、必死に耐えるしかなかった。
アズラエルの舌は、流れ落ちる汗を追うようにして下半身に移っていく。冷たい舌先がつーっと胸の間を通過し、へその穴をほじるようにしてさらに下降していった。そして辿り着いたのは、指が蹂躙し続ける密林。アズラエルの鼻に熱気を伴ったむわっと濃厚な匂いが漂ってくる。
秘唇は白く泡立つ液体を溢れ出していた。それが冷たい舌先ですくい取られる。
「ひっ、くぁ」
初めて受ける感触にイブリースは戸惑う。火照る体を収めるために自分の指で触れたことはある。しかし男の舌がその部分に触れることはむろん初めてだった。嫌悪と同時になんともいえない不思議な気持ちよさが全身を駆け巡る。その感覚は打ち込まれたクスリの

せいだと思いたい。あるのはただの嫌悪のみだと思いたい。しかし――。
ヌチョリ……そんな音を立てて、アズラエルは舌全体で濡れた秘穴の入口を舐める。
「ひぃ、あ、あああん」
イブリースは悲鳴をあげて仰け反る。濡れた股間から脳天に向けて快楽の電流が走り、濡れた金色の瞳が焦点を失ってさまよう。少女の指が空中をかきむしった。
無意識のうちに、自分から求めるように股間を前に突き出していた。髪の毛と同じ水色の陰毛に覆われたピンク色の裂け目を舐めながら、顔に股間を押しつけられたアズラエルは顔を上げた。イブリースと目が合い、小さく笑う。少女は慌てて腰を後ろに引いたが、自分から快楽を求めてしまったという絶望が心を覆った。
「素直に私を求めたらどうだ？」
口の周囲を水飴のような愛液で濡らしながら言う。イブリースは首を左右に振って拒否したが口は開けない。開けたら甘い声が出るのを抑えられないように感じたからだ。
死の天使は再び少女の股間に顔を埋め、冷たい舌でベトベトに濡れたスリットを愛撫する。ヌヂョリヌヂョリ……と粘ついた水音が響く。ゾクゾクする快感の触手が股間から伸び、イブリースの全身を愛撫していた。
全身がフルフルと小刻みに悶える。アズラエルの舌が粘っこい牝蜜をすくうたびにその悶えは少しずつ大きくなり、宙に浮かんだ身体をゆらゆらと揺れさせた。まるでその危う

げな精神の均衡を表しているかのようにイブリースの背筋はピンと張っている。股間を舐められれば舐められるほど、自分の身体が自分の物でなくなっていく。
死の天使は這わす舌の動きを一段と速くした。舌先を襞に絡ませ、それを伸ばすようにして丁寧になぞる。鼻先はぷっくりと腫れ上がったクリトリスに擦りつけて二重の快感を引き出そうとしていた。
イブリースは下半身が切り離されるような感触に慄然とした。巨大な快楽で精神と身体が区切られる。身体の中でなにかが蠢いているような、舌で舐められている穴の奥からなにかが頭をもたげて姿を現してくるような感触だった。
「ひぃ、やぁ、やだ、なにか、なにかくるよぉ……」
何十体ものバイオ・エンジェルを葬った戦士とは思えないほど、弱々しく快楽に溺れた声がその口から漏れる。視界がピンクの靄(もや)に覆われ、なにも考えられなくなる。
アズラエルの舌が肉洞に深く差し入れられると、そのピンクの靄は濃くなった。その中で虹色のスパークが走る。イブリースは再び、自分から求めるように股間を突き出していた。そんなことをしちゃいけないと囁く自分がいる、それを押し退けて快楽を得たいとする自分がいる。相反する二つの自分の意思にイブリースは戸惑い混乱していた。頭の中はもうグチャグチャでなにも考えられない。
ピンク色の秘肉をかき回していた死の天使の舌がいったん離れ、包皮に包まれてほんの

ちょっと顔をのぞかせていたクリトリスに吸いついてきた。硬くしこる豆を貪るように吸いつき、唇で包皮を押しのけ、舌でつるつるした表面を撫で上げる。瞬間、イブリースの視界を覆うピンク色の靄が虹色のスパークとともに弾けた。

少女は目を見開き、全身を大きく震わせて背を反らす。

「あひぃ、あああああっっ」

秘穴から大量の牝蜜が噴き出た。こらえきれず絶頂を迎えてしまったのだ。死の天使の氷のような顔を粘つき泡立つ蜜で濡らしながら、イブリースは脱力してうなだれる。

アズラエルは立ち上がると、自分の顔をベトベトにした濃厚な香りを放つ牝蜜をハンカチで拭い取った。そしてイブリースの顎を掴んで顔を上げさせる。

その金色の瞳は虚ろ。口がなにかを言おうとしているようにぱくぱくと開閉を繰り返していた。アズラエルは満足げに笑い、ハンカチで涙と涎で濡れた彼女の顔を拭きながら恍惚として話しかける。

「このような状態でも、お前は美しいな。ますます私の物にしたくなった」

「だ、黙れ……」

まだ身体を走る快楽の余韻に悩まされながら、イブリースは力のない声で返す。もはやそれが本心からの言葉なのか、本人にも分からない。それだけ混乱していた。

死の天使は喉の奥でククッと笑い、手を差し伸べてイブリースの両膝を拘束する糸を消

し去った。少女は両手だけを拘束されてだらりとぶら下がる。
「お前の美と強さを私の物にする。私の野望を達成するために強さを使え。私を悦ばすために美を使え」
男は荘厳に言い放ちながらスラックスから肉槍を取り出した。大きく張りつめた傘、サオには浮き出た血管が巻きついて脈動している。イブリースの瞳に恐怖の色が湧く。それは戦士としての恐怖ではなかった。女が本能的に備える、未知の性体験への恐れ。
脅える少女のスラリとした足がアズラエルの脇に抱えられた。
「くぅ、やああ……」
金色の瞳には怯えの光が宿り、汗で濡れた身体がカタカタと震える。蛇を連想させる肉の固まり、その先端が濡れた秘唇の入口に触れる。
その瞬間、少女は暴れ出した。糸が手足に食い込む痛みの反動で涙が自然と流れてくる。真姫とは違い、生まれてからまだ間もない人造人間のリオは、そのぶん性に対する備えというものが足りなかったのかもしれない。
ずぶり……。
破瓜の恐怖というひびの入った堤防はあっけなく決壊した。
「い、やだっ！　こんな、こんなの……」
拘束された両腕と抱えられた両足を無茶苦茶に振り回す。

『第五章　反逆の天使と死の天使』より　その２

強烈な生臭い匂い。ピラニア人間の性器が放つ匂いだった。それが目の前に突き出され、頬や唇にぐりぐりと押しつけられる。恥垢だろうか、粘ついた白いものが頬になすりつけられた。ツン、と鼻を突く匂いに、胸からこみ上げるものを必死に抑える。

「舐めろよ！　吸うんだ！」

イブリースはなにを要求されているかを理解した。それを拒否すればどうなるかは、こちらを狂気の視線で見つめるラミエルを見れば分かる。きっと、彼女に押さえつけられている真姫が責めを負うに違いない。いや、殺されてしまうかもしれないのだ。

ちゅ、ぱ……。

ピンク色の亀頭に軽いキス。ピラニアは自分で逸物を掴むと、動きのつたないイブリースに細かく指示を始めた。まずは舌を突き出させて、その上にペニスを置いた。匂いと味を堪能できるように、まんべんなく舌の腹に擦りつける。次には、舌をねっとりと亀頭に絡みつかせ、舌先でくびれをなぞらせてカリに溜まった恥垢を舐め取らせた。そしてラストに、まるで赤ん坊のように尿道をちゅうちゅうと吸い出させる。

そしてトカゲはそんな少女の股間に吸いつき、剥けたままのクリトリスをその尖った歯で転がすように甘く噛んだ。

「んぐっ――ふぐぁ！」

その刺激が与えられると同時に、開いた口に肉棒が突っ込まれた。そのまま叫び声を上

げる。痛みの声ではない。嬌声だ。
ペニスをくわえさせていたピラニアはもごもごと息苦しそうにするイブリースを見て嗜虐心を煽られ、鱗のついたペニスをさらに押しつけた。ぱんぱんに怒張したそれが喉元まで到達し、余計に息苦しくなった少女は必死になって舌を暴れさせる。口をすぼませ、頭を振って逃れようとした。しかし、ピラニアはがっしりと押さえつけてそれを許さない。それどころか口腔のあちこちに先端を擦りつけ、激しくピストン運動を始めた。
そんな様子に刺激され、他のバイオ・エンジェルもイブリースの身体に群がる。
開発されたばかりのアナルにさっそくペニスで蓋がされた。愛液でぬるぬるになったそこはズルリと太いペニスを呑み込んでいく。その入口は肉棒をギュウギュウに締めつけ、ヴァギナなどは比べ物にならないほどに圧迫してきた。
その様子をクリトリスをいじりながら見ていたトカゲも、我慢ができないとばかりにその細い身体にのしかかる。張りつめたペニスをヴァギナにあてがい、一気に差し入れた。精液と愛液でぐちゃぐちゃになっていた内部からは、ひと突きするごとに泡だった液体が溢れ出てくる。さらには、次の順番を待っていた蟻人間がイブリースの手に自分のモノを握らせ、無理矢理擦らせ始めた。
フェラチオを続けていたピラニアに絶頂が訪れる。イブリースの頭を掴んで引き寄せた。口腔内の舌に乗り上げた男根から、どくどくと粘液が溢れ出る。

「んぐぅ、むぐっ、んあ……」
フェラチオと手淫を強制され、前と後ろの穴に挿入されて突き上げられながら、イブリースはひたすら耐えた。普通の人間である真姫からの支援はすでに期待できない。あの様子では、気を失わないでいられるのがやっとだろう。彼女が特殊能力を使えるようになるとは考えられないし、そうなれば彼女はただの人間と変わらない。ならば、私が彼女を護るしかないのだ。逃げ出すことなどできようもない――。
胸が大きな手で包まれ、豊かな双丘がぐにゃっと歪められる。むろん、彼女に打たれた淫薬の効果はまだ続いていた。普通なら痛みを伴うだけの行為でも、いまのイブリースには快感となる。思わず吐息が漏れた。
「んふぁっ……！　はぁ……」
「ほら、休むんじゃねえ」
フェラチオにいそしむはずの口が休んでいたのを見咎められ、蜘蛛人間が腕の数本を使って顎を掴む。無理矢理に口腔が開かれ、テラテラと黒光りするペニスがねじ込まれた。相変わらず下半身の穴には双方とも男根が埋め込まれ、下から突き上げられている。
イブリースにはもはや戦士としての面影など見る影もなく、衝撃にガクガクと揺らされながら苦しさと喘ぎの入り混じった声を上げ続けるだけだった。
「ざまあみろ！　あのイブリースが俺のチンポ美味しそうにくわえてよがってやがるぜ！」

トカゲが勝ち誇ったように言いながら腰を回転させる。その言葉を聞いた本人が、ピクリと反応した。意識は朦朧としかけながらも、自分が侮辱されているということは分かったのだろう。悔しそうな視線を目の前のトカゲ男に向けてきた。
「おいおい、反抗的な目だな。いくら手足が自由だからって、逆らったりしたらあっちの女にとばっちりがいくぞ！」
自分のペニスを擦らせていた蟻人間が、ラミエルに押さえられたままの真姫を顎で指し示す。その途端、イブリースの瞳からは反抗の色が消え、弱々しい諦めの表情へと変わっていった。
「あんまりしょぼくれんなよ！　つまんねえだろうが！」
「んぐ！　んううう！」
蜘蛛人間がそう言って少女の口からペニスを抜いた。同時に、その顔に向かって勢いよく白濁液が爆発する。青臭い匂いのもとが顔中に降りかかった。マスクにかかった大量の精液が目の前をだらりと流れ落ちて視界が塞がれる。反射的にイブリースは手でそれを拭った。しかし、その液体はねばねばと伸びるばかりで一向に視界は晴れない。弱々しい手つきで何度も何度も液を拭う。
少しずつ少しずつ液体を剥ぎ取り、やっと視界がはっきりしてきたころ、今度は蟻人間の汁が降りかかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/